

いきなり玄関に入ってきた見慣れた顔に、主婦の美貴子は驚いた。美貴子は三十歳の福岡市の分譲マンションに住む、美人妻だ。口を尖らせると、

「チャイムくらい押してもらえませんか。」

と抗議すると、

「うっかりしてすみません。だけど防犯上、玄関に鍵を掛けておくのは当たり前ですよ。マンションの玄関はオートロックですけどね。それを確認する意味でも突然ですが、開けさせてもらいました。」

とその四十代のだらしなさそうな男は発言した。美貴子は納得して、

「そうでしたね。わたしが不用心でしたわ。でも、お向かいの北山さんも玄関に鍵をかけないとか言ってましたけど。」  
フンフンと鼻を鳴らしながらその男は聞いていたが、背が高く肥満体の中年男性だ。

「北山さんにも注意しておきましょう。ただ、北山さんにではなく藤村さんに言わなければならないことがあります。おわかりでしょう。」

藤村美貴子は、そしらぬ顔をする、

「なんですか。わたしには何の事か・・・。」

「ふん、わかっているくせに。先月の管理費を振り込んで欲

しいんですがね。」

美貴子はあわてて、

「あと十日、待ってください。必ず振り込みます。」

そう言い訳をしながら、藤村美貴子は腰を動かした。主婦にしては短いスカートが揺れた。足を開いて立っているのでパンティの下の方が中年男の眼に入った。男はごくりと生唾を飲み込むと、

「十日もすれば来月の分を振り込む日になります。オーナーの方から今日取り立てるように言われましてね。」

パンティの色は黄色だった、と男は思い返していた。美貴子は愛想笑いを浮かべると、

「まあ、上がってお茶でも飲んでいってくださいな。コーヒーを出しますから。」

「あまり時間はありません。この後、巡回にも回りますからね。」

「お手間は取らせません。お上がりください。」

美貴子は後ろをその男に見せると、屈んで豊かな尻を突き出すと台所に入ったようだ。男は、しぶしぶと玄関を上がった。台所からトレイにのせてコーヒーカップを運んできた美貴子はカーデガンを脱いで白の上着になっていた。メロンが二つ付いている様に胸は大きく膨らんで、ゆさゆさと揺れてい

た。豪華な応接セットのガラスのテーブルに美貴子はマイセンのコーヒーカップを置いた。立っている男に、

「どうぞ、お座りください。お粗末なソファですけど。」

男はそれに腰掛けた。すわり心地はとてもいい。マイセンはドイツの陶器で古い歴史を持ち、コーヒーカップには剣のマークがついている。二本の剣を交えた形が青色で描かれている。高価な代物で、ドイツのものは大抵なんでも高い。ベントにしてもそうだ。カップ一個なら一万円と消費税といったところだ。これは 2013 年一月現在の値段で、アベノミクスという政策では値上がりするのかどうかは誰も何ともいえない。男はマイセンのカップを手にとると、ぐいとコーヒーを飲んだ。カチャ、とカップを置いて、

「コーヒーぐらいでは待って一日ですね。奥さんが外出して、いなかった事にしておきましょうか。」

美貴子は喜びで眼を輝かせると、

「明日までには何とかします。」

男はマイセンのコーヒーカップの受け皿にも剣のマークが付いているのを見て、

「なんか高級そうなカップですね。管理費なんて一万千円ですよ。こんなものを買えるのだったら・・・。」

「いえ、これは結婚した時に友人に貰ったものなんです。」

そう言いながら美貴子は男に見えるように両脚を大きく開いた。世界最大の下着のメーカー、トリンプのパンティが大きく現われた。トリンプも又、ドイツの会社だ。美貴子はパンティを上を引き上げているのか、割れ目がくっきりと写っている。美貴子が素早く足を広げたので男は釣られてその部分を見てしまった。美貴子は足を広げたままである。そこから眼を外すと男は、

「そういえば奥さん。奥さんを前にぼく、昔だけどテレビで見た事ありますよ。アイドルグループだったかなー、たしかアフタヌーン少女とかいうグループ名だと思いますけど・・・。」

藤村美貴子は照れたように微笑むと、両脚を心持ち少し更に広げた。割れ目の形も左右に広がる。

「そう、でしたけど。結婚して夫の転勤で福岡市に来たんです。もう5年も前になるかしら。今では福岡市の街を歩いても誰もわたしに気づかないんですよ。」

男はニヤリとして、

「それなら貯金もたくさんあるんじゃないですか。管理費くらいまとめて払ってもいいと思うけどな。ぼく、アフタヌーン少女のCDは結構、買ったんだけどね。」

「それは、ありがとうございます。でも、わたしの貯金も主

人と一つにしてまして、主人が管理してますから。」

そう言いながら美貴子は両脚を開いて元に戻す動作を数回した。その度に割れ目のあたりがピクンピクンと動く。中年男はそこを見ると眼をそらせた。思わず見てしまったのだ、元アイドル歌手の股の付け根を。その価値は一万千円なのか、と男は考えたが、

「それでは、ご主人に連絡させていただきます。私の勤務時間は五時半までなので、ご主人の会社の方に電話しますが・・・。」

美貴子は狼狽すると、

「それは困りますわ。このマンションの管理費はわたしが毎月振り込んでいますから。修繕積立金もですけど。」

「修繕積立金は問題なく振り込まれています。実際の問題として、わたしの給料は修繕積立金からは出ないのですけどね。会社の方からは今月の私の給料から減額するつもりらしいのですが、奥さんのとこだけなんですよ。」

男の顔は真剣味を帯びた。美貴子は関心なさそうに、

「それなら少し遅れても会社の方はいいいという事なのですね。」

「そうではないと思いますけど。私としても安い給料の少しでも減ると大変なんですよ。」

美貴子は頭を深く下げて、

「すみません。明日までになんとかしますから。」

と言いついた時に上着の上から胸の谷間が見えた。ブラジャーはしている。意識的に見せてくれたようにも見えた。男は立ち上がると、

「それでは明日、又来ますよ。」

と苦々しく吐き捨てる。長身の肥満体を玄関まで移動させた。

男の名前は三船敏行という。福岡市の県立高校を卒業後、上京して不動産会社に就職した。バブルの時は羽振りがよかったが、バブルが弾けてその会社は倒産。別の不動産会社も採用してくれなかった。アルバイトから派遣に登録して働いたが政権交代で派遣の禁止により、仕事を失う。都営住宅も五十歳以上でなければ入居できず、都の住宅補助金を受けようかとも考えたが仕事に目途がつかないので故郷に帰ったのだ。そんな故郷でなんとか分譲マンションの管理人の仕事にありついた。福岡市の中央区大名に本社を構える繁売住宅という会社は主に分譲マンションの販売管理を行う大きな会社だ。元は早良区（さわらく）で賃貸住宅の仲介をしていたが、小さな分譲マンションから始めて成功すると、福岡市の

あちこちにお城のような巨大な分譲マンションを建設していった。福岡市はかなり前から一戸建て住宅を建てる土地は中心に近い場所はなくなっていた。近郊の筑紫野市などが建売住宅が販売されてはいるものの、通勤には時間がかかるため、市内の中心になるべく近いところに住みたい人が多いために分譲マンションがすぐに完売する現況で、建売住宅も大いに儲かっている。他には東京からの分譲マンション会社のものも少なくはない。ライオンズマンションやダイアパレス、東急、三井パークホームなどが眼につく分譲マンションだ。三船敏行も四十歳になる。管理人になるには早い年齢だが、他に仕事は見つからなかった。彼の担当している博多区の博多駅から南の巨大な分譲マンションは建築されて新しい。とはいえ分譲マンションなので主婦の年齢は三十代後半が主で、藤村美貴子は若い方だ。三船は美貴子の部屋を出てからも彼女の黄色いパンティが目の前にチラつくのを意志の力で振り切りつつ、管理人室に戻った。

藤村美貴子はエリート会社員の男性と結婚して芸能界をやめた。結婚生活は五年になるが子供はまだいない。そのせいもあってか、貯蓄するより浪費する事がなかなかやめられないでいた。歌手だった頃より少し太ったので、博多駅近くのエステサロンに行ったりアマゾンでダイエットサプリメント

ントを購入したりしていた。その購入も一時にかなりのものを買ってしまう。芸能人の多い無料ブログでブログも作ってみたが、文章を書くのが面倒になって閉鎖した。ひとつはアクセス数が少なかったのも原因で、今は彼女が属していたグループより別の四十人以上いるグループに注目がいつているためのようだ。ステルスマーケティングを頼まれる事もなかったのが幸いだとは言えるのだが。

夫の拓郎は深夜に帰宅する。エリートな彼には仕事が山ほど押し付けられる。

「ただいまあー。」

疲れきった夫の声を玄関で聞いた美貴子は、

「お帰りなさい。今日も晩御飯は外でだったのね。」

「ああ、取引先との接待でご馳走を食べたよ。」

「そーお。なら、ベッドの中でのご馳走はまだ食べれるわよね？」

美貴子は豊乳を拓郎の背中に擦り付ける。

「今日はいいいよ。土曜の夜ならできるかもな。」

美貴子は失望をあらわにすると、

「はやく食べないと腐っちゃうわよー。」

と投げかける。ハンサムな拓郎はにこりともせず、

「風呂に入ってくるよ。」



と言うなり美貴子から遠ざかった。先にベッドで寝ていた美貴子の隣に拓郎がパジャマ姿で入ってくると、

「おやすみ。」

と言うが早いか眠ってしまった。美貴子は夫のモノにパジャマの上から触ってみたが、そちらもすぐに眠ってしまったらしい。

安い家賃の木造アパートに帰った三船敏行は万年雪のような布団に入ると眠ろうとしたが、昼間見た藤村美貴子の黄色いパンティを思い出すと股間に血液が集まってくるのを感じた。少しの時間で、敏行のモノはカチンカチンになった。

（今頃、藤村のやつ、旦那とセックスに励んでるんだろうな。あの時見えた割れ目に突っ込んでな一。）美貴子の上で腰を激しく振っている男の姿を敏行はボンヤリと想像してみた。

次の日、三船は藤村の部屋へ朝から集金に行った。ドアノブを回したが、鍵が掛かっていた。チャイムを鳴らすと、

「はい。」

「管理人です、おはようございます。藤村さん。」

「今あけますね。ちょっと待ってください。」

昨日より若やいだ声がした。ガチャと音がしてドアが開く。

取っ手を握って中に入った三船は、下着姿の美貴子を見てしまった。思わず股間にエネルギーが集まりかけるのを制して、  
「奥さん。着替えの最中なら開けなくてもいいですよ。待ちますから。」

扉の外に出かかる三船に美貴子は近づくと、管理人の制服に右手をかけた。

「ドアを閉めてくださいな。通りかかった人に見られますから。」

三船は慌ててドアを閉めた。美貴子は三船の肩を引くと、

「あがってください。」

と言いながら左手で軽く三船の股間に触れた。美貴子は嬉しそうに、

「元気がいいですね。朝から。」

三船は答えようがなかった。美貴子の甘い匂いが鼻にかかっていた。ボンヤリする頭を左右に軽く振ると、

「すみません。あの管理料をお願いします。」

美貴子は今度は右手でぐうっと三船の股間を握ると、それはますます膨らんだ。

「奥さん、やめてください。これ以上、触られたらぼくは、もう・・・。」

「うふふ。主人はとっくに出勤しているわ。わたしたち最近、

セックスレスなの。だから、管理人さんにストレスを解消してほしいのよ。」

美貴子は三船の腰に左手を回す。右手は三船のモノを握ったまま、

「靴を脱いであがってよ。管理人さん。」

三船はそのままの姿勢で靴を脱ぐと、部屋に上がった。美貴子の右手にペニスを握られたまま三船は歩かされた。美貴子は止まると、左手でドアを開けた。そこは夫婦の寝室だった。甘酸っぱい香水の匂いが三船の鼻の穴から入ってくる。三船の股間は管理人の制服のズボンを破りそうだった。美貴子は、  
「ズボンを脱がせてあげる。」

両手でベルトを掴むと外して、フックも外し、チャックを下げた。三船の黒いパンツが出てきた。小さなバナナが中に入っているようだ。美貴子はそのパンツも降ろすと、ついに管理人の天空に向かった肉根を眺める。

「まあ、主人のより大きいわ。食べたくなっちゃった。」

彼女は三船のフランクフルトソーセージに、しゃぶりついたのだ。管理人は、

「あっ、だめです。奥さん、イキそうです。」

と声を出すと、腰を震わせた。美貴子の甘い舌を自分のモノに感じて三船は、

（これが藤村美貴子の舌なのか。なんという滑らかな動きだろう。ああっ、おれはこんな事をしていいのだろうか。）窓の方を見るとカーテンが、かかったままだ。部屋には灯りがついている。あまりに明るいため、朝の太陽光と思っていたのだ。美貴子は舌を這わせながら、三船のきんたまを右手で撫でた。その瞬間、三船は、

「あああっ、奥さん！藤村さん！」

と小さく叫ぶと、生ぬるい液体を勢いよく美貴子の口の中に発射していた。それは美貴子の口の中にビシャッとかかった。美貴子はだらんとした顔で、その液体を飲み干している。

「おいしいな。管理人さんも気持ちよかったですよ。」

「はい。あ、あの藤村さんの舌って滑らかですね。」

「歌手だったからじゃないかな。ボイストレーニングの時、男の先生のペニスをよく口に含まされたわ。そのまま、メロディを口ずさんだ事もあるの。女性歌手って結構、そんな訓練してるみたいよ。アフタヌーン少女のメンバーもみんな作曲家の先生のちんこをしゃぶってるし。そうしないと曲を提供してやらないぞ、なんて言われたりしてね。わたしたちも若かったし、作曲家の先生のアソコにも興味があったから、進んでしゃぶってみたんだ。なかなかの味がしたわ。そうするうちに、アフタヌーンも売れ出したっていう事なのよ。」

美貴子はその頃を回想する。

初老のその作曲家は自宅のマンションの防音設備が整った部屋でピアノを弾きながら美貴子を指導していた。美貴子が誤った音を歌うと、

「だめだめ。そんなノドじゃ、素人だ。今から、プロの歌手としてデビューする。そのためにはな、特訓が必要だ。」

部屋の中には美貴子とその作曲家だけだ。白髪が少し混じったその男は、

「特訓についてくる勇氣はあるか。」

と美貴子に聞いた。美貴子は有名な歌手になれるのなら、と思ひ、

「はい、がんばりますのでお願いしますっ。」

と元気よく答えた。男はうなずくと、ピアノの椅子に座ったまま美貴子に姿勢を向けると、右手でズボンのチャックを引き下げ中からダラリとしたモノを出した。それはまだちいさなソーセージのようなものだった。美貴子はハッとしたが、平静を顔に装った。作曲家は美貴子の眼を見ると、

「どうしてるんだ。啜えなさい、私のちんこを。」

と促してくる。美貴子は、きゃっ、恥ずかしいなどという反応はせずに思い切りよくそのソーセージを跪いて口に入れ

た。アンモニアの匂いが少ししたが、ソレは少しずつ大きくなってくる。やがてそれは美貴子の口の中に広がった。男は満足そうに、

「君は舌の動かし方がうまいようだね。いい歌手になれるよ。そのまま続けていい。そうだな、今練習している曲をハミングしてみなさい。」

美貴子は新曲を作曲家のモノを咥えたまま、ハミングした。男は、

「よーし。なかなかいいよ。こういった訓練はいずれ役に立つ。テレビ局のプロデューサーやディレクター、それから業界の大物に求められた時もためらってはいかんよ。スターダムにのし上がるには、こういった接待が必要なのだからね。それを知らん若造はアイドルになればキャーキャーと騒いでくれるが、それが君たちのビジネスだ。うっ、おおー、もう久し振りだなー。出すよ、出る出る、打ち出の小槌。」

作曲家は身をのけ反らせると美貴子の口の中に緩やかに放出した。美貴子は吐き出すとまずいかな、と考えて全部それを飲み込んだ。それを見た作曲家は大満足のようなだった。後年、その作曲家は美貴子のソロアルバムの曲を全部作ってくれた。

ハッと我に返った美貴子の前で、管理人がズボンのベルトを締めているのが見えた。三船は、

「藤村さん。今月の管理費はいいですよ。ぼくが出しておきますから。」

と提案すると、美貴子はしめしめという顔をして、

「そうしてもらえると助かります。これ位でいいのかしら。」

「もちろんですよ。デリヘルはもう少しするし、て、それと比較してはいけないと思います。ただ、風俗の女性は中洲でも三十歳未満が常識です。」

「あら、それならわたしは失格ね。もう三十だもの。」

「普通の三十歳とは違いますよ、藤村さんは。」

「嬉しいな。ああ、カーテン開けますね。どこからも見えな  
いし。」

「失礼します。藤村さん。」

そそくさと、三船は玄関に移動した。その日は五時半にいつものように管理業務は終了したが、それから中央区大名にある繁売住宅の本社に藤村家の管理費を三船は届けに行った。というより、近くのゆうちょのＡＴＭで自分の口座から一万千円を卸して持っていったのだ。

本社一階の業務部で三船は、

「サンパール博多駅南の藤村さんの管理費ですが、奥さんに

直接預かってきました。奥さんが忙しくて振り込めないとの事でしたので。」

業務部の若い女性が三船に近づいてくると、三船が差し出したお札を受け取り、

「社長が三船さんが来たら、社長室に来るようにとの事です。」

と事務的に話す。三船が戸惑うとその女性は続けて、

「社長室は最上階の十階です。エレベーターで行けます。」

三船は踵を返すと、エレベーターで社長室に駆けつけた。社長室のドアの横にパナソニックのテレビドアフォンがあった。それを押すと、

「三船さんですね。お入りください。」

秘書らしい女性の声がする。管理人服の三船の姿は社長室の秘書の机の上にあるテレビパネルに写っていた。三船が中に入ると、秘書の席のすぐ後ろにある大きなデスクに座った人物が社長だった。六十代に見えるその姿は、でっぷりと太って血色がいい。まん丸顔の社長は立ち上がると、

「やあ、三船君。集金、ご苦労さん。君に話しておく事がある。応接室に行こう。」

社長は部屋を出ると、三船を手招きして隣の応接室に入った。三船もその部屋に入ると、ドアを閉める。自動的に外のドア



の上のほうにあるランプがついて、

「来客中」

の表示が出た。社長は背広姿にネクタイでソファに座ると、

「まあ、かけたまえ。」

「はい。」

三船が社長の真向かいに座ると、社長は上着のポケットからハバナの葉巻を出して火をつけた。一本を三船に手渡し、

「ライターは持っているか。」

「はい、百円ライターを持っています。」

社長はにや、と笑うと、

「私がつけてやろう。ダンヒルの金だ。」

テーブルの上に置いた豪華なライターで三船に葉巻の火をつけてやった。三船は恐縮して、

「恐れ入ります。こんなライターは初めて見ました。」

社長は得意そうに、

「そうだろう。6 5 4 0 0 円もする。君もいつか持ちたまえ、な。」

「わたしなど、とても・・・。」

「まあ、まあ。夢は持つものだよ。私もね、小さな場所でやっていた不動産の仲介業者だったけど、倅約して分譲マンションを建てていった。最初のうちはただ、次のマンションを

建てるために資金を残すので精一杯だったし、ダンヒルどころか、もらいもののマッチで「わかば」を吸っていた事もある。何十年も経つと、どうにかここまできたのさ。君が自分の金で藤村さんの管理料を持ってきたのも分っているよ。」  
三船は驚愕の顔つきで、

「どうして、ご存知なのですか。」

「いやね、藤村さんから電話があったんだ。十日もすれば返すという事だった。それからね、藤村さんのたつての希望で、藤村さんの修繕積立金は半額になったからね。」

「はあ、それは了解しましたが、でもお得ですね。」

「そう。あるプランを提案したんだよ。管理量も払うのに困っているのなら、と思ってね。」

三船は好奇心がムクムクと起こり、

「そのプランってどんなものなんですか。」

「今のところは、まだ君には秘密だ。そのうち話す事もあると思うよ。ご主人も了解済みだそうでね。」

謎のプラン、なんなのだろうと三船は思ったが、他人事でもあり社内秘でもあるのなら自分のような一管理人が知るべき事ではないだろうと思い、

「その件も覚えておきます。ただ、入金チェックは私がする事ではありませんし。」

「そうだな。本社でやっている。今日は、君の管理人としては稀な行為に私から礼を言おうと思ってね。」

柔和な笑みを浮かべた社長の顔は、いい人柄が滲み出ていると三船は思った。社長は葉巻を吸うと、オニックスの灰皿に置き、一そのオニックスの灰皿は縞目模様の天然石だ、

「今日はゆっくりと葉巻を吸って帰りなさい。」

「はい、有難く頂戴いたします。」

「ふむ。君は管理人には勿体無いな。私は管理人さんをすべて知っているわけではないから。」

「いえ、私などは人生の落ちこぼれですから。」

「なにを悲観的な事を。君はまだ四十歳なのだろう。これからだよ、本社の仕事もやってもらうように考えておく。」

三船は葉巻を吸うのを止めて、

「本当ですか、社長。そんなにいい話、夢みたいです。」

「私がウソをついて、どうなるかね。しばらくはもう少し管理人業務に励んでくれたまえよ。」

「はいっ、社長。」

その日はアパートのぼろい部屋も気品が現れたような気に三船敏行は思ったのであった。

次の日も三船はサンパール博多駅南の管理人室で掃除の

後の午前中をボンヤリと管理人室に座って、過ごしていた。目の前を住人の一人が通り過ぎるかと思うと、三船に気づいて、その三十代前半の女性は声をかけてきた。中背だが肉感的なスタイルの二重まぶたの色気漂う雰囲気で、

「管理人さん、今日仕事が終わったらヒマですか？」

「ええ、ヒマではありますがね。」

「五時半に終わるの？ここの仕事。」

「ええ、大抵はそうですよ。」

「じゃあ、迎えに来るから待っててよ。」

「え？ええ？」

三船が何か言おうとすると、その女性はオートロックを開けてマンション内に入った。（どういう事だろう。でも、待ってないといけないかな。）三船の頭の中に社長の一業務に励むように、という声が聞こえた。（これも業務かあ）と思ってみたのだ。それから集合ポストの前に行き、大きなゴミ箱に捨ててあるチラシを更に大きな収納箱に入れる。たまったら廃品回収業者を呼んでトイレットペーパーに交換してもらおう。そのトイレットペーパーは管理人室の便所で使う。この集合ポストのチラシを住民が捨てるのを嫌って、つまり何もしたくないからだが、チラシを禁止している分譲マンションが多いのはご存知だろうか。こういった事もしないマンシ

ョン管理会社や管理人は究極の怠け者である。が、かなりあるのは事実。こんな分譲マンションに入居している住民はチラシを拒否しているために情報弱者となっていくのは必定なのだ。三船の勤める繁売住宅では、サンパールマンションのすべてにこのゴミ箱を設置している。こういった良心的な分譲マンションは実は少ない。であるからして、チラシ禁止の分譲マンションに入居したら出世は望めないものと思ってよいだろう。チラシ一枚も情報なのだ。今の社会で何が流行っているのか、売れているのかさえ掴めない様では、この社会で成功することなどあり得るはずもない。

それが終わると、マンション前の緑地に水をやって、マンション内に入ると全部の通路を歩いて行くのだ。

「今日も異常はなかった。」

管理室に戻って三船敏行は呟く。それからズボンのポケットに手を入れて、さっきゴミ箱の中から見つけた一つのチラシが入っているのを確かめた。それは、風俗のチラシだ。実はこれは、福岡市の条例で配るために持つ事さえ不法であるとされている。デリヘルのチラシである。三十分、一万二千円からある。そのコースはフェラチオして終わりだが、オプションもついている。ディープキスだのアナルセックスとか追加を頼めば料金も上がる。敏行はこのマンションの近くの古

い木造アパートに住んでいるので持っかえって、ジックリと眺めるつもりだ。彼は独身なので風俗には精通している。アフター5:30にはマンションの住民は敏行を見る事もない。が、今日の五時半にはあの女性が迎えに来るという。で、五時半になった。敏行は管理人室のカーテンを閉める。マンションの玄関外で待っていると、

「お待ちになったかしら。」

と問いかけるのは、あの女性だ。

「いえ、待ちません。」

「そう、それなら大通りに出ましょう。」

二人は車が常に通る四車線の道路に歩いて行った。その女性は、車道に近づくとタクシーを止めた。黄色いタクシーは、すぐに止まった。その女性は後部座席に先に乗ると、

「乗ってくださいよ。」

と笑顔で誘うので、敏行も乗り込んだ。女性は、

「宗像のホテルまでね。」

運転手は、

「宗像のホテルって、いっぱいありますよ。」

「宗像に着いたら、わたしが道を言うわよ。発進してね。」

「わかりました。」

宗像とは福岡市の北東にある人口九万六千人ほどのベッド

タウンだ。住宅がある以外は水田ばかりの所と言えば分りやすい。タクシーはまずは福岡市東区へ向かう。敏行の右に座った女性は、

「自己紹介もしてなかったわね。神具瑠真子（しんぐ・るまこ）って言います。シングルマザーなのよ。中洲でキャバ嬢してるからー、あのマンションもパトロンにキャッシュで買ってもらったのね。福岡市の財界のおじいさんだけど、月に二回訪ねてきてセックスして帰っていくのよ。」

敏行は前の運転手が聞いていたら、と思ってバックミラーに映る運転手の顔を見たが表情を変えない。それならと答えて、

「月に二回って・・・そんなもんでしょうね。」

「他に二回は別の女のところに行ってるみたいよ。だから、毎週一回はイタシテイルのよ。」

「へええ。なかなかの方ですね。管理人室からはお見かけしません。」

「六時過ぎに来るから、見ないでしょうね。奥さんはもう、おばあさんらしいわ。奥さん公認だから、気楽みたいよ。」

敏行は自分の股間に瑠真子の左手が置かれるのを感じた。爪にはマニキュアで、色は黄緑色だ。ネイルサロンで手入れしているのだろう。瑠真子は左手に力を入れると、

「でも、わたしも月に二回じゃあ物足りなくってさ。管理人

さんは普通の管理人より若いようだけど、と思って。独身な  
んでしょ？」

「そうです、よくわかりましたねー。あうっ。」

瑠真子の左手が敏行のモノを掴んで左右に動かしたのだ。

「水商売ならそれくらい見抜かないと、やっていけないわよ。  
わたしナンバーワンなのよ、指名でね。あら、もう硬くなっ  
てるのね。たまりに溜まった山奥のダムってところなのかな  
ー。」

敏行は半年前に中洲のピンサロで連続三回抜いてもらって  
から、射精していなかった。それを答えるわけにもいかない  
ので黙っていると、

「わたしも、この前じいさんが来てから十日たってるし、中  
年のあなたの方が魅力的だわ。おっぱい触ってよ。」

「い、いや、こんな場所では・・・。」

瑠真子は左手で敏行の右手を掴むと、自分の左胸に当てた。  
見た目より豊満な感触だ。特につかまずに当てていると、

「握ってみてよ、あ、は一ん。もっと強く。あなたのモノも  
力強くなってる。ホテルまで我慢してね。」

外は箱崎から名島に向かう道路で歩道の人はい多くはない。国  
道に沿って歩く人はそういないのだ。敏行はゴムマリを掴ん  
で遊ぶように瑠真子の左の乳房を揉んでみた。はあはあ、と



瑠真子の息遣いが荒くなる。彼女は敏行のズボンのチャックを降ろすと巨根を取り出した。そのコーラの瓶のようなものを見て、

「すごいなー。これなら、ホテルに着く前に一発出しても大丈夫だね。」

瑠真子はポンっと飛び上がると、敏行の膝の上に乗った。それから足をタクシーの床につけてスカートの中からパンティをずり下げると素早く自分の秘密の部分に敏行の瓶を当てると自分で腰を沈めて貫通させた。

「あああん、いいっ、すごい、すごーい。」

瑠真子は大声で悶えまくった。運転手の耳に届かないはずはない。しかし、運転手は安全運転を続けている。敏行の左の目には窓ガラスを通して流れる香椎の町が見える。香椎神宮は右手に数百メートルのあたりにある。古く大きな有名神社だ。瑠真子の左目はそちらの方を向いていた。

「ああ、香椎神社の近くねえっ、おまんこいいわっ、まんこ、いい。もっと突いていいのようっ！神社で、ああ・・・わたしのマンコ、締まってる？」

敏行は右目で窓ガラスの外を思わず見ながら、

「はいっ、締まってます。香椎神社も閉まってますよ、もう。うーん。」

瑠真子が激しく腰を振り始めたのだ。敏行はすぐにイキそうになるのをこらえていると、タクシーの車内は瑠真子の愛液の匂いが充満した。バックミラーに見える運転手の顔の唇は笑っているように歪んでいる。信号が赤になってタクシーが停止すると、歩道の人には車内の様子には気づかないようだ。瑠真子は動きを止めている。青になって発車すると彼女は腰を動かし始めた。瑠真子は断片的に喘ぎ声を洩らしている。今まで黙っていた運転手が口を開いた。

「白バイが走ってきてますよ。捕まっても知りませんからね。」

瑠真子の耳には聞こえなかったようだが、敏行の耳には聞こえた。それで、

「瑠真子さん、一旦、ああ、やめませんか？」

「いい、時にやめられないわよ。公然な行為じゃないでしょ、だから白バイも気づかないわっ。」

白バイはタクシーの左側を通過していった。前方のバイクのスピード違反を追いかけていたらしい。そのバイクが白バイに呼び止められ停車したところをタクシーは楽に通過していった。それを左眼で見て安堵した敏行は熱い液体を瑠真子の体内に放出してしまった。ビクッと体を震わせると瑠真子は腰の動きを止めて、敏行にキスをするのと体を離して後部右

側の座席に戻る。パンティを元に戻すと、

「運転手さん、すみませんでしたね。わたし、欲求不満で場所も弁えずに。」

「あはは。いいんですよ。最近によくある事です。昨日なんか、三人のお客さんが乗ったんですが、後ろに男女一名ずつと、助手席に女のお客さんです。やっぱり長距離だったんですけど、後ろの方達がやりはじめたのは気にしなかったんですが、私の隣の女性のお客さんが私の・・・その、股間に手を伸ばしたんで、びっくりしました。それだけは、やめてもらいましたけどね。短大生とかいう長髪のおとなしそうな人だったから、人は見かけによりませんね。私は熊本出身ですけど、福岡市の乗客って・・・と熊本の同業者に携帯電話で話したんですけど、そしたら来月に私のタクシー会社に転職するって言うんです。」

後部座席の二人は黙って聞いていた。

「そういう事って、最近よくありますよ。初めてじゃないからもう動転はしないとですよ。熊本でタクシーを運転していた時は流石に、いませんでしたけど。そういうお客さん。福岡ってすごいなあ、と思いますたい。」

敏行は質問してみた。

「その後ろの方も学生さんでしたか。」

「いや、その二人の人達は若い会社員の男女でしたね。男性は背広にネクタイだったし。あ、福岡市を出ましたよ。」

古賀市に入ったのだ、突然に田舎めいた雰囲気の色となる。田畑が見えるわけではないし、町らしい建物は続いているのだけれども何処となく福岡市とは違う感じがある。この古賀市に山崎パンの工場がある。国道から見えるような所にはないのだが。宗像市に入ってからには瑠真子が道を運転手に指示して一軒のラブホテルに到着した。瑠真子はラブホテルの入り口で、

「休憩にしておきましょう。」

と話しかけると敏行の右肩を叩いた。首を素直に振って敏行は同意した。宗像のような小人口の場所でもラブホテルは四、五軒はある。宗像市内にも不倫カップルはいるだろうし、それ以外の場合にも使われるために存続しているという状況である。今の社会は不景気であると言われる。が、しかし宗像にラブホテルがあるという事は本当の意味で不景気なのか、と問いたいものではあろう。というのも休憩だけでも三千円から四千円位はするものだからだ。不景気を嘆くのは職業の選択を誤っているのではないだろうか。滅び行く産業というのはいつの時代にもあるものである。

宗像のそのラブホテルは広々とした部屋であった。潰れた

いのもサービスの良さなのか、フロントでドリンクを二本、二人はもらったが部屋に入って瑠真子が、

「これ、精力ドリンクよ。さすがにいいサービスしてるわねっ。」

と笑顔の波を漂わせる。敏行もうなずくと、その栓を開けて一気に飲む。途端にムズムズと股間の辺りがしてきた。瑠真子もうまそうに飲んでいる。顔を紅潮させると、

「女のわたしには、こういうの効くのかな。初めて飲んだけど。」

ベットサイドのテーブルには小型の機械がある。それに気づいた瑠真子は、

「これ、美顔器だわ。使ってみるか。」

手にとって顔にローラーを当てて、

「なかなか、いい感じだわ。もう一つあるけど、これは・・・。」

「バイブですね。中々大きいものです。」

敏行が続けて発言した。彼は瑠真子の隣に立っている。瑠真子はクスッと笑うと、

「あなたのモノの方がこれより大きいわ。これを使う必要はないでしょ？」

「えへへへへ。」

ベッドに座ると目の前に大きなビデオ再生の画面がある。瑠

真子は、それに近づくと、

「お金入れなくてもいいみたいよ。見放題だって。有名メーカー目白押し、SODクリエイト、プレステージ、ベイビーエンターテイメント、h.m.p、ラハイナ東海、W a a p、桃太郎映像出版、オフィスケイズ、MAX-Aらしいわよ。」

「AVのメーカーは三百社以上ありますよ。もっとあるはずですが。」

「ここのは表示されてるのは、これだけだけど。一度アダルトビデオ見ながらやりたかったんだあ。パトロンは嫌がって、してくれなかったけどね。」

「ぼくは、構いませんよ。新鮮味はあると思いますよ。」

「よかった。つけてみるから。」

瑠真子はSODクリエイトのチャンネルを選んだ。素人ものが映し出される。出演している女性が裸になるのと合わせて瑠真子も裸になり、セックスを始めると瑠真子も敏行にしがみついてくる。映像の中の体位と同じ体位で敏行と瑠真子もセックスして、男優が顔射の体勢に入ると瑠真子は、

「あなたは中に出していいわようっ！」

と声を上げたので敏行は、

「ああっ。」

と抜かずに二発、中出ししてしまった。それでもチンコは

中々小さくなるのには時間が、かかった。

帰りのタクシーでは瑠真子は前の助手席に座り、十分位して運転手の股間に右手を当てたが運転手は何も言わない。瑠真子はズボンの上から運転手のナニをこすり始めると、

「海に突っ込みかけた事がありましてね。彼女とドライブしていると、海ノ中道海浜公園に行ってたんですけど。彼女がズボンのチャック開けて、ぼくのパンツの上から握ったんです。止めさせたから、海に落ちなかったんですけど。」

と静かに語ったので、瑠真子も手を離したのだった。タクシーは静かに走行して、博多駅を通過した。帰りは早く感じられるのは、夜になったので夜景のために眼が追う対象が少ないせいかもしれない。瑠真子は自宅のマンションの少し前にタクシーが来ると、

「ここで停めて。管理人さんも、ここでいいでしょ。」

そこは三船敏行のアパートの近くだったので好都合だ、

「あ、この辺が助かります。」

タクシーは停まり、瑠真子は料金を払った。二人が降りるとタクシーの運転手は笑顔を浮かべて、ハンドルの近くの冷蔵庫らしきボックスから麒麟の一番搾りを取り出すと窓ガラスを開けて、

「お客さん、ビールでも飲んでください。おつりもらったのが多すぎるから。」

瑠真子に呼びかけて、彼女はその冷えた缶ビールを受け取ると、

「これは結構なものね。わたしいつも仕事で飲んでるから、管理人さんにあげる。」

敏行に渡した。のどが渴いていた敏行は、その缶ビールを開けて飲み始めた。瑠真子は敏行に、

「これから時々行きましょうよ、長距離ドライブに。今日みたいに費用はすべてわたし持ちでいいから。泊まりはできないの、わたしシングルマザーだから。じゃあ。」

そういえば、そんな感じだと酔いが回り始めた敏行は瑠真子の黒い服を後ろから見ながら思っていた。部屋に帰ると六畳の部屋でポケットからマンションのゴミ箱の中にあった風俗のチラシを見ると、（今日はもちろん、一週間は持ちそうだな、性欲は。）と思い、それを部屋の片隅に放り投げた。

敏行は福岡に帰ってから未だデリヘルを呼んだ事がない。自宅に来られるのも何かと都合がいいとは思えない。2005年頃に風俗のチラシ、主にデリヘルだが福岡市は市の条例でこれを禁止してからというものデリヘル業者はインターネットでホームページを作って宣伝するしか手がなくなった



のである。敏行のアパートは木造ではあるがインターネットは光ファイバーを無料で見れるタイプなので、福岡　デリヘルで検索すれば四百十六万件も出てくる。もちろん四百十六万もデリヘル業者がいるわけではないので、いかに多く紹介されているかという事になる。

ネット上でも福岡のデリヘルは評判がよく、出張で福岡に来たビジネスマンも利用しているらしい。だが、これからの敏行にデリヘルが必要かという、もしかしたら瑠真子の誘いの回数によっては不要となるに違いない。勤務時間外にマンションの住民とナニをしようが問題ないではないか。何をしようが、というのが普通の場合ではあるが。敏行はナニを瑠真子とするわけである。そういえば、あの元アフタヌーン少女の藤村美貴子とも今後又、何かあるのかもしれないし。思えば金に恵まれない敏行ではあるが、サンパールマンション博多駅南に勤め始めてから女に不自由しなくなるみたいだ。確かに自分は仕事に恵まれないから金にも恵まれない。だけでも・・・敏行はパソコンを立ち上げてポータルサイトのニュースを見ると、資産家の夫婦が惨殺された事件が出ていた。五十代の夫と年下の妻で高級車を二台も乗り回していたお金持ちだったが、首を絞められて埼玉に埋められていたという。それを見て敏行はお金持ちでも、こうなったら一卷

の終わりだと思った。自分は東京で派遣の仕事を失ったが命までは失ってはいない。分譲マンションの管理人の仕事も一般サラリーマンよりは、性的に欲求不満の女性、熟女と関係を持つことができるし遣り甲斐のある仕事だと思った。ヤリ甲斐のある仕事である。

さすれば、自分もそうであったが夢か幻のような大金など考えずにこれから生きていけばいいのではないかと敏行は思う。先の事件を考えるにあの資産家は犯人にとっては唯の札束に過ぎなかったのだ。殺せば使える大金が、という思いしかなかったから犯行に及んだ。金持ちにまつわる犯罪はよくある話だから、敏行は自分の金欠は幸運ではないかとも思う。だから管理人になって、熟女と色々な性の関係を持てる状況になったのだ。これを天に感謝せずにおれようか。自分は独身だが、先の資産家夫婦みたいに殺される事はまずない。ビールの酔いが回ってきた。がビールだから軽いものだ。すぐに醒めていく。(えーい。もっと飲んでやれい。) 敏行は西鉄バスで中洲に行った。福岡市にはこの西鉄バスというバスしかない。バス会社としてはバスの保有台数が日本一で、東京のバス会社が日本一ではない。西鉄は日本一どころか世界一のバスの保有台数を誇るらしい。

中洲のとあるバーに入ると、一人の女性がカウンターに座

っていた。敏行の小学校の頃と同級生で福岡市のローカルテレビ局のアナウンサーになった福美伸子(ふくみのぶこ)だ。彼女の姿はネットの動画でも見れる。一時期の女子アナブームの時は三十代だったが、どうも独身を通したらしい。というのはローカルなフリーペーパーに福美伸子のインタビューをしている記事が載っていて、彼女の経歴が書いてあったからだ。小さい頃の顔の感じはやはり残っている。(あのおとなしかった福美がアナウンサーなんて。) 敏行は東京に就職していたから知らなかったのだ。敏行は思い切って彼女に近づき、声をかけてみた。

「福美さん。実に久し振り。おれを覚えているか。」

福美伸子は三船敏行を振り仰ぐと、

「まあ、三船君やろ。覚えと一よ。」

とアナウンサーらしき声で答えた。この声が職業的に鍛えられて子供の頃とは違ったものになっている。三船は自分を覚えてくれていた嬉しさに、

「となりに座ってもいい？」

「いいよー、もちろん。」

三船は巨体を福美のとなりの席に乗せると、伸子は顔を敏行に向けて聞いてくる。

「三船君は仕事は何をしてるのかなあ。」

吐く息が酒臭い。照れたように敏行は、

「分譲マンションの管理人をやってるよ。」

「あら、そういうのはもっと歳を取った人の仕事じゃないかな。」

「うーん、でも他に仕事がなくてね。東京で仕事がなくなったから戻ってきたけど。」

「ふーん。わたしもね、フリーのアナウンサーになったけど、今、テレビって予算がないからギャラは減ったわ。結婚しとけばよかったなあ、と思う。」

「そうねえ、福美はおとなしかったから、まさかアナウンサーになるとは思わなかったよ、ほんと。」

「大学の先輩に好きな人がいて、その人が入社したテレビ局に後を追って入社試験を受けたら合格できたんだけど。その先輩はわたしの事は好きではなかったらしくて、わたしの同期のアナウンサーと結婚してしまったのよ。」

福美は少し涙目になった。敏行は哀れに思って、

「そういう事は結構あるかもしれないし、気にしなくてもいいよ。」

「うん。もう気にはしてない。その同期とは親友だったからショックはあったけど。彼女の旦那さんとは話はしないけど、彼女とは携帯電話で話をすることもあるのね。」

「それは、そんなものかな。」

「彼女の住んでいるマンションは分譲マンションで博多駅の南にあるのよ。確かサンパール博多駅南とかいったかしら。」

（そのマンションの管理人をしている）と敏行は言おうかと思ったが、何か間に立つような感じがして言わない方がいいと黙っていると、

「三船君の勤めている分譲マンションって何処？」  
と鋭く福美は聞いてきた。

「そのサンパール博多駅南だよ。」  
福美は大きく眼を開くと、

「まあ。奇遇ってこういう時に使う言葉だわね。そしたら、わたしの同期のアナウンサーと顔を合わせてるかもよ。」

「うーん。どうかな、住民の人の名前までは全部知らないからね。」

「矢張（やはり）っていうのよ、彼女の姓は。旧姓は一時（いちとき）っていうんだけど。」

一時アナウンサーは福美伸子より遥かに美人だった。福美はおとなしくて目立たないアナウンサーだったが、一時美歌（いちときみか）が寿退社してから少しずつ頭角を現していたのだ。

「矢張さんなら、やはり知らないよ。管理人と親しく話をする人はあまりいないから。」

「そういうもののなのね。美歌もわたしと同年だから四十歳。三船君も同じでしょ。昔若い頃は美人でも、今は歳相応の顔になってるわ。」

「元美人アナウンサーらしき人は、記憶にもないよ。普通はよく見ても横顔だからね。」

そういえば福美の横顔も、もう若くはなかった。三船は、さっきシングルマザーとセックスプレイに励んでいたのが夢のように思われた。福美は三船の頭の上を見ると驚いて、

「矢張さん、でしょう？お久しぶりです。」

と声を出した。敏行がそちらを見ると、背広姿の中年男性がゆったりと立っている。その男は形式的に微笑むと、

「お久しぶり。福美君、いやもう退社したから福美さん、かな。酒は控えめにした方がいいよ。肝臓を悪くするのは知ってるだろうけどね。」

矢張の顔は普通だが苦味のあるのが魅力的だ。彼はテレビの画面には顔を出さない部署で働いている。福美は少し頬を膨らますと、

「もう上司でもない矢張さんの意見なんか聞きませんよ。奥さんは、お元気ですか。」

「元気ですよ。たまには家内もいるし、うちのマンションに遊びに来たらいい。家内は、お茶とか習ってますから。」

敏行は、この男性の顔も今まで見た事はなかった。苦味はあるが、平凡な妻帯者って感じで別に女性にもモテはしなさそうだ。いかにも愛する妻がいます、という顔であるから。こんな男性を福美伸子は好きになったのか。そういえば福美伸子の人相は幸薄いような気もする。福美は矢張の提案には答えないでいると、矢張は店の奥に立ち去ってしまった。福美は下を向くと、

「どうでもいいや、あんなやつ。」

と呟いた。敏行は福美のグラスを見ると、

「確かにすごいペースだなあ。女性の深酒なんて様にならない、かもね。」

福美伸子は、それに逆らうようにグラスの残りを飲み干すと、

「マスター。おかわり、注いでねー。」

店主はうなずくと、カクテルをシェイクし始める。福美は酔いが回ってきた顔で敏行を見ると、

「矢張に失恋したあと、わたしにも何人か彼氏はできたんだけどね、みんな深酒で逃げられたのよ。それというのもね、矢張に去られた日、いや一時美歌の結婚式の後で深酒をしたけど、それが習慣になっていったんだわ。それからの彼とデ

ートをして飲みに行くと、わたしの方が余計に飲んでしまっていて呆れられて、連絡が絶えるのよ。」

福美は右耳に掛かった髪の毛を掻きあげると、

「それでも酔いが醒めるのは早いよ。四十って女としては女でなくなっていく歳だと思っていたけど、今のわたしがその歳になったから。」

「ぼくも四十になった自分なんて考えられなかったけど、マンションの管理人をしているなんてもっと考えられなかった。」

福美伸子は、あはは、と笑うと、

「ニュースをやることもあるけど、最近市内の分譲マンションで六十歳の男性管理人がマンションの敷地内の立ち木に立小便をしているところを住民に見られてクビになった原稿が来たけど、その時、緊急で他のニュースが入ってきたから読まなかったことがあったけどな。三船君は大丈夫よねえ、そういうのは、ね。」

「ああ、でも福美さんがアナウンサーでよかったよ。芸能人なら、こんなところでも写真に撮られる可能性もあるでしょ。」

「そうねー、わたしが芸能人？アナウンサーになるのも迷ったのよ。人気のある職業ではない頃に入社して、他になり手



がいなかったから仕方なくやってたら女子アナブームとかになって、結構わたしも祭り上げられたわよ。なんでブームになったのかは、あの頃、いいニュースが多かったからと思うのよ。」

「あー、ベルリンの壁を崩すとか、ソ連の終わりとか、かなー。」

「そうね。最近はいいいニュースはないし。ここ三年は沈んだものばかり。東北の大震災はそれの最たるものだわ。でも、政権も本来のものになったから、これからは明るいニュースも増えるのかな、って。」

敏行は、そうあって欲しいと思った。いや、自身については明るい話題は女性とのセックスがすでにある。だから、

「福美さん。男ヒデリは長いのかな。ぼくでよかったら、ぼくも独身だから。」

福美伸子は流し目で小学校の同級生を見ると笑顔で、

「小学校の同級生って、いつまでも子供の時のままみたいな気持ちができるのよ。わたしたち、今日会ってしまったけど普通は顔も見なくなる場合が多いと思うな。三船君も巨体で顔も大人だけど、なぜかわたしには小学校の時の三船君に思っていた感情しか湧かないのね。小学生の時って、性的なものって男女間にも感じないでしょ。三船君は、わたしにとって

はいつまでも小学校の同級生なのかもね。」

敏行は酔ってはいたが、意識はあった。そのまま福美の意見を受け入れていいのだろうか。自分には魅力がないのを福美は遠まわしにそんな言い方で、諭しているのではないだろうか。

「福美さん、ぼくに魅力がないって事かな。それならそう言ってもいいよ。同級生じゃないか、遠慮しないで言ってくれないか。」

福美はいたずらっぽい顔を見ると、

「逆にわたしに魅力があるの？四十になった女なのよ。」

そう言われて三船敏行は福美の顔から下をゆっくりと酔いながら眺めてみた。胸は膨らんでいるし、ヒップも大きい。敏行は一息つくと、

「福美さん。いい体しているよ。四十なんてもんじゃない。三十だなー、この体は。」

「あら、ありがとう。そう言われれば、三船君の体も素敵に見えてくる・・・。」

「アナウンサーで、しかも福岡地方だからゴシップにもなんにもならないよ。今からでも、ホテルへ行こう。」

「ええ、いいわよ。」

二人は店を出て歩いて近くのシティホテルに入った。部屋に

入ると、三船敏行は福美伸子をお互い服を着たままで抱いた。福美は眼を閉じた。それと同時に敏行も眼を閉じると、ドウと後ろのベッドに倒れこんだ。そして、そのまま眠ってしまったのだった。

翌朝、三船が起きるとベッドの枕元にメモが置いてあった。

楽しい思い出をありがとう 何もしなかった三船君はステキです

わたしは泊まらずに帰ります

福美伸子

(そういえば、あのシングルマザーで出し尽くしていたのかもなあ)

翌日は日曜日で三船敏行は管理人の仕事は休みだ。他に祭日も休みだし、盆と年末年始も休みがある。休みの日が来ると、実にホッとする気がした。管理人の仕事は気が楽そうに見えるが、じっと座っているのも年寄りならいざ知らず、四

十歳の敏行には退屈に感じられるのも苦痛だ。それで休みの日は昼近くまで寝ている事になる。休みの前日はアダルトビデオをパソコンで見る。DVDのディスクはビデオテープより小さいとはいえ、ある程度買うと積み重ねた上下の高さも高くなってくる。人は滅多に来ないが、万が一のために眼につくところには置けないものである。それで最近はHDDの容量が150GBのノートパソコンを買って、アダルトビデオをダウンロードして見るのだ。一本の作品が1GB前後なので旧型のパソコンではすぐにHDDは一杯になる。フリーズしてしまう事も多かったのだ。又、早くダウンロードするために光ファイバーにする必要があった。こういった動画を見るためには光ファイバーで見なければスムーズに画面が流れなくなる事もある。

が、しかし、だ。アダルトビデオに出ている女性はほとんどは東京か、その近くの女性が多いので福岡市で見る女とは少し違う気がした。それに画面の中の女は取り出してみるわけにもいかない。素人の女性も簡単に出演してしまうけど、あれは画面に交渉のところを大抵写さないが、一万円札を何枚も見せて出演交渉をするのは敏行も知っていた。それなら自分にはできない事だと敏行は思う。休日の町を歩いても、女性は敏行をろくに見もせずに通り過ぎる。

昼前に起きた敏行は、菓子パンをコーヒーで胃に流し込むとネットサーフィンで福岡市の風俗店を見てみた。その数何と驚くなかれ、福岡市全部で2700以上もあるのだ。各区ごとに数百単位である。それだけ需要がある、という事は敏行みたいな彼女のいない男性は多いのだ。（彼女がなかなかできない人は多いなあ。福美伸子は彼氏が、というより旦那を見つけられなかったが、おれもキスもできずに終わってしまった。あいつには何か男を寄せ付けない何かがあるのかもしれない。）

ついでに敏行は北九州市の風俗店も調べてみた。すると、全部で500程度だ。福岡市となんという差だろう！北九州市の男性は真面目なのか、すぐに彼女を見つけるかのどちらかではないか。

敏行は出会い系にも入っているが、風俗店はこんなに多いのに女性からメールが来る事は、ほとんどない。年齢も正直に分類しているせいもあるのかもしれない。

考えてみると福岡市には出張でビジネスマンが来る事が北九州市より多いために、風俗店の数も多いという事も考えられる。福岡市に出張というビジネスマンはネット検索で簡単に風俗店やデリヘルを見つけ出せる。そんな事も数多くある都市であるとは、町を歩いても感じられない敏行ではあった。

昼過ぎに自宅近くを散歩してみる。性的なものを感じられないのは当たり前だ、博多駅南という土地にはラブホテルもないのだ。博多駅前に一軒のラブホテルはある。

その事を敏行は知らないが、南に向かって歩いていると竹下というアサヒビールの工場がある土地に来た。そのビール工場の手前辺りにあるラブホテルの近くに敏行は歩いて来てしまっていた。駐車場完備らしい。紺色のベンツが悠々と出てきたではないか。敏行は思わず運転席を見てしまった。あっ、あれは・・・

矢張だ。この前、中洲のバーで会ったから覚えている。助手席には若い女性が乗っていた。奥さんか？そんな事はないだろう。福美伸子と同年なら四十のはず、第一奥さんとラブホテルに入る男性はまず、いないぞ。と思っていると、その大型のベンツは次第にスピードを上げて走り去った。浮気、不倫、男性の・・・敏行の頭に言葉が浮かぶ。福美は、あんな男と結婚しなくてよかったのだ。福美伸子は幸せには、なっていないかもしれないが不幸にもならないですんだ。三船敏行は小学校の頃の福美を思い出していた。（よかったな、福美。おれは同級生として安心した。この事は、福美に伝えてやろう。）